

## 水不足の世界で



曾野 綾子  
作家

小説家というものは、大所高所からものを考えず、人生の末端しか見えない人種である。その上、私は 40 年近く、途上国の田舎で働いている日本人の修道女たちに活動資金を提供する NGO をやっていることもあって、いつも世界の末端と繋がって暮らしてきた。ところがこのところ、まったく違う国——コンゴ民主共和国とフィリピン——から同じ内容の申請が同時に来たのである。両国共、学校の建物に天井板を張って欲しいという。村の学校の屋根は波板トタン状の材質が張ってあるだけのバラックで、驟雨がくると授業ができない。雨が漏るのではなく、屋根を叩く雨音が煩くて先生の声も聞こえないのである。天井板を張ろうとするだけ生活が向上したのだ。

修道女たちは帰国する度毎に報告に来てくれる。その中には渇水の話が多い。生活用水が枯渇しかけている土地が全世界に実に多いのである。

昔西アフリカにあるベナンという国の内陸の村に入った時、女性たちがアオミドロのようなものが生えたどろどろの水で洗濯をしているのに驚いていたら、「ここよりもっと奥地に住んでいるイタリア人の神父さまは、牛がオシッコするのを待っててそれで顔を洗っているのよ」と聞かされた。

コンゴの田舎でも、インドの中央部のビジャプールという不可触民の町でも、南アのダーバンのスラムでも、水の争いは絶えない。共同水栓は普段は断水したままで、週に何日か、1・2 時間だけ水が出るという状態だ。当然水を巡って女性たちは、つかみ合いのケンカもする。首尾よくポリタンクに水を 20 リットル入れても、それを 5 百メートル、1 キロと頭に載せて運ぶ。世界中なぜか水汲みは女の仕事だ。彼女たちの人生の時間とエネルギーのほとんどは、水運びと薪運びに費やされる。

それでも人間の住んでいるところには、雨期に何日間かは雨が降るのだ。村ごとに池を掘って水を溜めればいいのにと私は思っていたが、誰もやらない。しかし溜め池を掘らないには理由があると教えてくれた人もいた。水を溜めると付近に塩類が集まってきて、土壌が使いものにならなくなる。

アマゾンの中流の村では、河のすぐ傍に住む人が井戸の相談をしていた。河はすぐそこである。「何も井戸なんか掘らなくてもいいでしょうに」と言うと、アマゾンには飲め

ない水流がある、と教えられた。

水を充分すぎるほど確保する、というのが人間の基本的な知恵である。私は日本でも断水があった時代を知っている。平和が続いた後でも、知人の中国人の教授が或る年日本にやって来た。夫が「今度は何の学会？」と聞くと、「風呂に入りに来たのさ」と笑っている。香港はその年水不足だった。

私は渇水を極度に恐れている。そうなってから急いで貯水池は作れない。「コンクリートから人へ」などという軽薄なキャッチフレーズは誰が作ったものか知らないが、実に思い上がった言葉だろう。戦後日本人は、発電のためにも、農業用水・工業用水・生活用水のためにも、貯水池としてダムを作って来た。そして断水などという事態の起きないシステムも整えてくれた。私はこうした仕事を果たした人々の功績を忘れない。しかし大臣も世間も過去を忘れ、未来に起きるかもしれない途方もない変化や危機を恐れない。

今の日本の秀才の学生のほとんどは、停電と断水という英語の単語を知らない。試験にも多分出ないのだろう。しかし世界中は停電と断水だらけだ。私はこの 7 月にインドに行くが、基点のバンガロールは IT 産業の中心地だということに、旧市街の部分はいまだに毎日か一日おきに停電していた。これがインドのシリコンバレーの実態だ。

私の三浦半島の家は農村の中にある。農道はすべて末端まで舗装されている。コンクリートの農道の上に、出荷前の大根の朽葉を棄てる。路が土だった時代の習慣なのだが、コンクリートの道の上では、朽葉はなかなかうまく腐らない。農道は舗装するのが不自然なのだ。しかし誰もがうちの畑の前を舗装されるのを望んだ。

その一方で、高速道路反対を叫ぶ。高速道路のないアフリカでは時速 15 キロしか出ない悪路はざらだから、牛の角で腹を刺された子供の牧童は、大司教が貸してくれた村でたった 1 台の自動車で、外科手術を受けられる 30 キロ離れた町まで移動する 2 時間に絶命する。高速道路がないという事はそういうことなのだ。

土木の仕事には無言の自負の部分が確固としてあるはずだ。私がそうした人々が残した仕事を「無名碑」と呼んだ理由だ。

大臣をはじめとする世間がどんなに軽薄でも、そうした信念だけは失わないことを、ことに若い「土木屋さん」たちに望みたい。